

「恋のThunder」新10人 ver. 最終版) ☆2021年7月4日改稿

作：高橋祐紀乃

登場人物

沢渡(さわたり)	女	会社員
穂高(ほたか)	男	沢渡の同期
日向(ひなた)	女	神に昇格した天使
北見(きたみ)	男	妖精
西野(にしの)	女	妖精
田中(たなか)	男	愛の神
浅井(あさい)	女	天使
豊田(とよた)	女	魔法使い
奈々(なな)	女	猫
海老名(えびな)	男	雷神

1 場

オフィス。廊下。

明転。

沢渡、ノートパソコンを脇に抱えて入ってくる。

穂高、遅れて同じ方向からリュックサックを背負って入ってくる。

穂高 「沢渡！」

沢渡 「穂高。」

穂高 「よかった、みつかった。ミーティングだったのか。」

沢渡 「うん。今日のも長かったー。しかもこれから資料作らないといけなくなったし。」

穂高 「ということはまだ帰れない？」

沢渡 「そういうことになるけど、どうしたの？」

穂高 「これから飲みに行こうと思ってる。」

沢渡 「あー、残念。行きたかったー！」

穂高 「結構かかる？」

沢渡 「うん、たぶん終電ぎりぎりだよー。」

穂高 「そっか。大変だな。」

沢渡 「繁忙期だからこういう日もたまにはあるよ。もう少しの辛抱だから落ち着いたらまた飲もう。」

穂高 「おー、声掛けるわ。」

沢渡 「あ、そういえばこれから雨降るって。」

穂高 「まじで？ 俺傘持っていないんだけど。」

沢渡 「しかも雷がすごいらしいよ。」

穂高 「それなら急いで帰らないと。」
「ごめん、お先にー。」

穂高、手を振りながら来た方向へ歩き出す。

沢渡 「・・・穂高！」

穂高、立ち止まり振り返る。

沢渡 「ちょっと待ってて。」

沢渡、すぐに逆方向へ出て行く。

穂高、見送ってから、リュックサックから小さな紙袋を取り出して見つめる。

沢渡、パソコンと折り畳み傘を持って入ってくる。

穂高、紙袋をさっと隠す。

沢渡 「この傘、持って行きなよ。」

穂高 「それだと沢渡が濡れるだろうっ」

沢渡 「わたしが帰る頃には止んでるらしいよ。」

穂高 「いいのか。」

沢渡 「もちろん。女性用(花柄、など)でもよい。(だけど。)」

穂高、笑顔で受け取り、

穂高 「サンキュー。遠慮なく使わせてもらっわ。・・・じゃあやっぱり今日。」

穂高、紙袋を沢渡に渡す。

沢渡 「何これ？」

穂高 「この間の旅行のおみやげ。」

沢渡 「あー、ダイビングしに行くって言ってたよね。リア充か！」

穂高 「ひとり旅だったけどな！」

沢渡、穂高、笑っ。

穂高 「・・・誕生日。」

沢渡 「え？」

穂高 「今日だろ、おめでとう。」

沢渡 「覚えていてくれたんだ！」

穂高 「もちろん。」

沢渡 「ありがとう！ さすがもてる男は違っね！」

穂高 「彼女いないけどな！」

沢渡、穂高、笑っ。

沢渡 「開けていい？」

穂高 「えー！」

沢渡 「え、って。」

穂高 「恥ずかしいじゃん。」

沢渡、穂高に有無を言わずパソコンを預けて開ける。
袋からアクセサリが出てくる。

沢渡 「お。着けちゃお。」

穂高 「……。」

沢渡 「(付けてから)どうっ?」

穂高 「自分が言っのもなんだけど、似合ってる。」

沢渡 「ありがとう!」

穂高 「……今度こそ帰るわ。」

沢渡 「うん、気をつけて。」

穂高、来た方向より出ていく。

沢渡、見送ってから、アクセサリーをゆっくり見つめる。

沢渡 「……こんな誕生日もいいよね。」

沢渡、思い出したように舞台前方まで行って、窓の外を眺めるように見る。

沢渡 「雨、駅までもつかなあ……。。」

雷の音(可能なら照明でも手前からガラス越しに映る雷を表現する。)

沢渡、びくっとして、

沢渡 「雷! ……室内でよかった。」

雷の音。

強めの雨が降り出した音。

沢渡 「わー、降ってきた!」

雷の音。

併せて頭上の照明が不安定に点滅し始める。

沢渡 「えっ?」

大きな雷の音。

沢渡 「きゃーっ!(叫ぶ。)

暗転。

雨の音が強くなる。やがてフェードアウト。

☆オープニングアクト(入れるなら。転換含。)

2場

外、らしい。

明転。

沢渡、うつぶせに倒れている。

沢渡、気がつき、ゆっくり起き上がる。

沢渡、周りを見回しながら、

沢渡 「え？ なに？ どういつい」とっ

奈々、猫耳としっぽをつけて入ってくる。

奈々、沢渡を見て立ち止まる。

沢渡 「げ、猫耳……。」

奈々、何か言いたそうに見るが、目の前を早足で通り抜ける。

沢渡 「ちょっと待ってー！」

奈々、立ち止まる。背中はやめたまま。

沢渡 「あの、すみません。」

奈々、ゆっくり振り返る。

沢渡 「ここは、どこですか。」

奈々、沢渡を見つめる。

沢渡 「……えっ？」

奈々、無言のまま見つめ続ける。

沢渡 「あの？」

奈々、早足で去る。

沢渡 「えー！ 何あれ？ ひどくないっ！」

沢渡、少し考えて、

沢渡

「リアルに猫だったりして。……って何言ってんだか。」

奈々、消えた方から入ってくる。

奈々、沢渡を見つめる。

沢渡

「やばっ、猫耳がまた見てる。やっぱり言葉通じないのかな？」

奈々

「……何してんの？」

沢渡

「あー！」

奈々

「あ、じゃないでしょ。こんなところで何してんの、って言ってるの。」

沢渡

「何って言われても……。」

奈々

「耳は？」

沢渡

「え？」

奈々

「羽は？」

沢渡

「は？」

奈々

「どっちもないの？ あんた何なの？ 偉いようにも見えないけど。」

沢渡

「……平社員です。社畜というか。」

奈々

「社畜？ 何それ？ 新種なの？」

沢渡

「新種って……。」

奈々

「まさかと思うけど、ちょっと来て。」

沢渡

「えー！」

奈々、沢渡の腕を取り、来た方向へ引っ張っていく。
二人、出ていく。

3場

外。

日向、白い服に羽をつけて入ってくる。

日向 「はー、今回はしんどかったな〜。なんでだろうっ？」

西野、薄めの異なった羽をつけてスキップして入ってくる。

西野 「あ、日向だ。」

日向 「西野ちゃん。今日も軽やかだね。」

西野 「もちろん。日向は調子悪いの？」

日向 「さっき、岩戸(いわと)を開けたら重いのでへとへとだよー。なんで女子にやらせるかねっ？」

西野 「田中さん、トSだからね♡」

日向 「西野ちゃんってかわいい顔してすいすいとさよならって言うよね。」

西野 「えへへ。」

日向 「しかも今日はいつもに増して建てつけが悪くてね、バリバリって言ったの。ひずんでないか心配。」

西野 「あの岩戸に限ってさすがにそれはないでしょー。」

日向 「でもね、わたしふわっとしたよ。」

西野 「その羽は何のためにしてるの？」

日向 「別に飛ぶためじゃないもん。妖精さんとは違うのよ。」

西野 「まあ妖精もめつたに飛ばないけどね。」

浅井、白い服に羽をつけて逆方向から入ってくる。

浅井 「日向ー！」

日向 「浅井。どうしたの？」

浅井 「田中さん、呼んでる。」

日向 「えっ？」

浅井 「至急来いって。」

日向 「え……。」

浅井 「もしかして岩戸開けた？」

日向 「……うん。」

浅井 「今日はまだ田中さんは何も言ってなかったと思うんだけど。」

日向 「今回の今を逃していつ開けるっていうタイミングが来るってもので、田中さんの承認を待ってる場合じゃなかったの……。」

浅井 「(溜息をついて)わたしはどつでもいいけど、田中さんが至急、だって。」

日向 「はーい。とっついでで西野ちゃん、お仕事の間です。」

西野 「了解。豊田さんはもう知ってるの？」

日向 「うん。あ、そっいえばさっき豊田さんのもとに行ったらね……」

浅井 「(遮って)日向！」

日向 「今行きます！ 西野ちゃん、また後でね。」

西野 「またね。」

日向、逆方向から出ていく。

西野、手を振って見送る。

浅井 「日向のやつ、何考えてんだか。田中さんに断りもなく岩戸を開けるなんて。」

西野 「でももう日向の判断でやってもいいんですよ。合格して神になったんだから。」

浅井 「仕事のフロー的にはまだ上司の承認が必要。」

西野 「上司って、田中さん？」

浅井 「うん。日向が天使から神になれたからって仕事の流れは天使だった頃と全然変わってないから。立場的にあたしより偉くなったわけでもないし。」

西野 「そうなんだ。神になってできる」ことが増えたはずなのに。でも合格してからますます仕事熱心になったよね。」

浅井 「仕事熱心というか、今日みたいに強引に仕事を進めることも多いんだよね。それに最近豊田さんと」こそ話していたけど、何か聞いてない？」

西野 「何かって？」

浅井 「ほんとに知らないんだ？ 豊田さんは西野の上司みたいなものに。」

西野 「うん。」

浅井 「ぶっ……。」

西野 「そろそろわたしも行くね。浅井、またね。」

浅井 「はいはい。」

西野、スキップして逆方向から出ていく。

浅井 「……妖精は軽いな。」

浅井、来た方向から出ていく。

暗転。

田中の部屋。
「愛・田中」とでかでかど書かれたビニール袋が被っている天使の羽が掛けられている。

明転。

田中、胡坐をかきながらファイルを見ている。

日向、入ってくる。

日向 「田中さん。」

田中 「お、来た。」

日向 「だって呼んだんでしょ。」

田中 「ああ。」

日向 「はい。そうです。おつしやる通りです。さっきふたりを入れました。」

田中 「まだ何も言ってるねーよー！ しかも承認降ろしてないのに……。」

日向 「遅いんですよ、田中さんが。」

田中 「俺は忙しいんだよ。」

日向 「やることはやってくださいよ。ふたりの機が熟した今この時を逃したら……。」

田中 「(遮って)そうは言っても今回は失敗したらさすがに始末書だからな……」

日向 「だいたいぶつぶつですって……」

田中 「そもそも承認なしで岩戸を開けるのはいつもに増して大変なはずなのに……。」

日向 「そういつごとか……」

田中 「あ……はあく。おまえをこの役に任命したのは間違いだったのかなあ。」

日向 「仕事の早い部下に対してそれ、ひどくないですか？ 田中さんの承認を待っていたら
実るものも実らな……。」

田中 「(遮って)恋はあせらず。」

日向 「ぶつ。(鼻で笑う。)

田中 「おまえ、失礼じゃね？」

日向 「(平坦に)いいえ、わたしは田中さんを尊敬しています。」

田中 「嘘くせー。」

日向 「はい、嘘ですから。」

田中 「かわいくねー。だから彼氏いねーんだよ。」

日向 「え、セクハラ？」

田中 「セクハラ。」

日向 「ハワハラ？」

田中 「ハワハラ。」

日向 「モラハラ？」

田中 「モラハラ………ってどれだけ続くんだよ。それに最後違くな？」

日向 「わたし人の世話で手いっぱいなんです。あー、仕事熱心……」

田中 「ぶっ。(鼻で笑う。) 仕事しかないだけだろ。」

日向、田中をにらみつける。

田中、気にせずに、

田中 「さすが昇格テストを満点で受かって神クラス入りした天使さんは違いますな。」

日向 「なんですかいきなり。おだてたって田中さんに対する尊敬の念は生まれませんよ。」

田中 「おまえ上司に敵しすぎるだろっ！ それにどっちかというところは嫌味だから！」

日向 「尊敬できる上司なら優しくしますよ。」

田中 「真っ向から俺を否定してるよな？」

日向 「あ、やっぱりわたし優しくくないですか。」

田中 「かなりな。」

日向 「じゃあお仕事、がんばってください。」

田中 「はいはい。でもさー、人の恋の手助けはっかりやっつるとたまに虚しくならない？」

日向 「ならないですよ。だって幸せのお手伝いじゃないですか。」

田中 「そうだけども、たまにはあたしも主役になりたいわ、とかねーの？」

日向 「え？ ないですけど。」

田中 「恋はいいぞー。」

日向 「田中さん、熱でもあるんじゃないですか。」

田中 「おまえ、ほんとに俺に対して失礼だな。」

日向 「しょうがないですよ。……まあでも、誰かに想われるっていうのはちょっといいな、とは思いますがね。」

田中 「ぶーん。」

田中、にやにやする。

日向 「なんですか、その笑みは。」

田中 「いや、別に。意外と近くにいるんじゃないの？」

日向 「いると思いますっ。出会いが少なすぎますよ、この職場。」

田中 「あっ、そっですか。」

日向 「もう、そんな」とより仕事ですよ、田中さん……」

田中 「そうだな……。」

日向 「あー、わたし、奈々を探しに行ってきます。」

田中 「はいはい。」

日向、出て行く。つとめるが、掛けられている羽を見て足を止めて、

日向 「何ですか、これ？」

田中 「さあ。今朝ギリシアから速達で届いたらしい。」

日向 「へえ、オリュンポスから……。」

田中 「愛の神オフィス 田中様」くらい省略せずに書いてもいいよなあ？」

日向 そうですね。最低「の神」はあったほうが…。」

田中 「様」の方が大事だろう！」

日向 冗談ですよ。で、何に使うんですか？」

田中 いや、添え書きも「後で別途連絡」、だけだったらしい。」

日向 「ふーん。」

日向、出て行く。

田中、見送って、

田中 「…あいつ、燈台下暗し、って言う言葉知らねーな。」

田中、ドヤ顔をしながら、

田中 「恋はあせらず。」

暗転。

5場

外。

明転。

奈々、話している沢渡の腕を引っ張りながら入ってくる。

沢渡

「どこまで連れて行く気なのよー！」

奈々、ため息をつきながら沢渡の腕を放して、

奈々

「そういえばあなた、雷を見た？」

沢渡

「え？・・・はい。」

奈々

「そうなんだ。もしかしてひとりで？」

沢渡

「ひとり、ですけど。」

奈々

「ふうん。」

奈々、沢渡をじろじろと見る。

沢渡

「あの、ひとりじゃいけませんか。」

奈々

「別に。あー、おなか空いたな〜。」

沢渡

「わたしも残業になっちゃって何も食べてないから、そういえば。」

奈々

「残業？」

沢渡

「あ、はい。仕事が終わらなくて。」

奈々

「あなた仕事してるの？」

沢渡

「そうですね。」

奈々

「仕事できるの？」

沢渡

「・・・腹立つなー。」

日向

「(声のみ)奈々、奈々奈々奈々。」

奈々、動きを止める。

日向

「おやつを持ってきたよー。(と舌を数度鳴らす。)」

日向、手に猫用おやつと猫缶を持って入ってくる。

奈々

「ちよつと日向。」

日向

「奈々。」

奈々

「あたし探す時に食べ物で釣ろうとするの、やめてくれる？」

日向

「そっか・・・。今日はひさしぶりに猫缶もあったんだけどなあ・・・。」

奈々 「え？」

日向 「しかもモンプリュー！」

日向、奈々、見つめ合う。

奈々、両方奪い取る。

日向 「ね、豪華でしょー！」

沢渡 「あの…。」

日向、沢渡に気づく。

日向 「え？ あなた…。」

沢渡 「はい？」

日向 「きゃー、ごめんなさいー！」

沢渡 「なんで？ー！」

日向 「奈々！ 彼女が今回の人で豊田さんにはまづき言ってきたから。あとほよろしくー！」

奈々 「あー、やっぱじり。」

日向 「それと今彼女と会ったこと、田中さんには絶対に内緒にしておいてー！」

日向、奈々の返事を待たずに、慌てて出ていく。

奈々 「そういうことだから。」

沢渡 「そういうことって、え？」

奈々 「行くよ。」

沢渡 「待って！ あの羽ついでたよね？」

奈々 「だから？」

沢渡 「だからって…。」

奈々 「(遮って)そんなこといいから。急いでくれる？」

奈々、逆方向から出ていく。

沢渡 「ちょっと！ 待ってよー！」

沢渡、逆方向から出ていく。

暗転(もしくは照明変化)。

6場

豊田の家。

明転。

豊田、考え事をしながら入ってくる。

豊田 「今日が難題の日です、って言ってたけど、どれくらいのものなのかしらね。」

西野、スキップしながら入ってくる。

西野 「豊田さん、戻りました！」

豊田 「お疲れさまー。あのね、帰って来て早々で悪いんだけどさっき日向が(…:。」

西野 「(遮って)日向！」

豊田 「会ったの？」

西野 「田中さんに呼ばれた。」

豊田 「あら。じゃあお察しの通り、わたしたちの出番、ですって。」

西野 「はーい。」

豊田 「じゃあ担当する人のデータを送るわね。」

豊田、西野に手をかざして西野にデータ送信する。

西野 「受信完了ー！」

豊田 「ねえ、今日の人、なかなかイケメンじゃない？」

西野 「うーん、よくわかんない。イケメンなの？」

豊田 「え。…:うん。」

西野 「ふーん。でもわたしはどつちでもいいー。」

豊田 「そっか。」

西野 「うん。」

豊田 「そっかだね。」

西野 「じゃあ、行ってきまーす。」

豊田 「はーい。よろしく。」

西野、スキップをしながら出ていく。

豊田 「妖精は軽快だな。」

豊田、少し考えてから、

豊田 「北見のこと、知ったらどう(思う)かな…:。」

奈々 「ただいまー。」

奈々、沢渡の腕を引っ張りながら入ってくる。

奈々 「突っ立ってるのを見つけたから連れてきた。」

豊田 「そうなんだ。」

沢渡 「いや、別にそういうわけでは……。。」

豊田 「あなた、もしかして……。。」

奈々 「うん。日向が言った。」

奈々、モンプチを見せる。

豊田 「今日はモンプチもあるのー。」

奈々 「うんー！」

豊田 「日向、奮発したねー。」

奈々 「いつもはあってもセブンイレブンなのにね。」

沢渡 「えー！」

奈々 「何か企んでるのかにやー。こいつもいつもと違う変な所にいたし。」

豊田 「変な所？」

沢渡 「あ……。。」

豊田 「はい？」

沢渡 「セブンイレブン、あるんですか？」

豊田 「あ……。あなた、お名前は？」

沢渡 「沢渡です。沢渡茜。あ、すみません！いきなりお家に入ってきて。」

豊田 「それはいいんだけど、沢渡さん。あなた、雷を見た？」

沢渡 「え？……。はい。」

豊田 「そうなんだ。もしかしてひとりで？」

沢渡 「ひとり、ですけど。」

豊田 「そっかあー！」

沢渡 「あの、さっきも言われたんですけど、ひとりじゃだめなんですか。」

奈々 「(遮って)ねー、豊田、おなか空いたんだけど。」

豊田 「そうね。あなたは？」

沢渡 「わたしも空いています。」

豊田 「そうなのね。じゃあ……。。」

沢渡 「(遮って)セブンイレブンに行きたいんですけど、どこですか？」

豊田 「セブンイレブン……。。」

沢渡 「遠いんですか？」

豊田 「うーん、遠くないこともないんですけど、入場パスが必要なエリアにあるのよ。だから

あなたは入れないの。」

沢渡 「え？。」

豊田 「それよりもうちで腹」しらせしない？」

沢渡 「いいんですか？」

豊田 「もちろん。奈々はモンプチでいいの？」

奈々 「これは食後のデザート……」

豊田 「そっか、じゃあ普通に準備するわね。沢渡さん、「ちららにござ。」

豊田、奈々、出ていく。

沢渡 「猫耳の食い意地、やばっ……。」

沢渡、追って出ていく。

暗転(もしくは照明変化。)

7 場

外。

リュックサックを背負った穂高、きよろきよろしながら入ってくる。

西野、スキップをしながら入ってくる。

穂高は気づかない。

西野、穂高に近づき、

西野 「やっほー。」

穂高 「うわあっ!」

穂高、びっくりして振り返る。

穂高 「何?」

西野 「西野だよ。」

穂高 「西野と言われても……。」

西野 「何、って聞いておいて失礼ね! そもそも何って何?」

西野、ぶいっとして穂高に背を向ける。

穂高 「「めんなさい!」って、羽?!」

西野、振り返る。

穂高 「今の、羽? 本物??」

西野 「ほんと失礼だなく。本物に決まってるでしょ。」

穂高 「ええっ!」

西野 「ねえ、雷見た?」

穂高 「いや、見てない。」

西野 「ええっ!」

穂高 「でも雨が降ってくるっていうからスマホで……。」

西野 「スマホ?」

穂高 「スマホ。」

西野 「スマホ……?」

穂高 「え? まさか、スマホ知らないの?」

穂高、ポケットに手を突っ込みながら、

穂高 「スマートフォンだよ、って、あれ?」

穂高、あちこちとスマホを探し始めるがみつからない。

西野 「どうしたの？」

穂高 「やべー！ 失くした、スマートフォンー！」

穂高、西野の両肩に手を置き、

穂高 「ちよつと、スマホの位置を探してある？」

西野、怯えながら、

西野 「……スマホ……スマホ……スマホ……」

穂高、手を外して、

穂高 「ごめん。もしかしてスマホをまじで知らないのか。」

西野 「……」

穂高 「つていうか、ごごはどごなんだ？ ねえ、君、名前は？」

西野 「だから西野だよー！」

穂高 「そっか。俺は……」

西野 「(遮って)穂高ー！」

穂高 「え？ 俺のこと知らないよね??」

西野 「(無視して)行くよー！」

穂高 「えー……」

西野、スキップしてはけ口の方へ行く。

穂高 「軽いな。でも……、飛ばないんだ。」

西野 「置いてくよー！」

穂高 「「めん……」

西野、出ていく。

穂高 「俺なんで謝ってるんだ? ……あ、ちよつとー！ 待って……」

穂高、走って西野と同じ所より出ていく。

暗転(照明変化。)

8 場

豊田の家。

豊田、奈々、沢渡が入ってくる。

沢渡 「本当にありがとうございました！」

豊田 「ありもので「めんなさいね。」

沢渡 「とんでもない！ あんなにおいしいもの、わたし初めて食べました。もしかして「は天国？って思っちゃいました。」

豊田 「あー、はは。(苦笑)」

奈々 「あんた、いつも何食ってたの？」

沢渡 「え？」

奈々 「料理できるの？」

沢渡 「…「いつほんとむかつく。」

豊田 「「めんなさい。」の「ほん」と口が悪くて。」

沢渡 「いえいえ。と「ろで」「はど」「なんでしょうか？」

豊田 「え？」

沢渡 「わたし、会社にいたんです。でも雷が鳴って、気がいたら外に倒れていました。しかも、明らかに自分の知らない世界で…。」

豊田 「そうだよね。」

沢渡 「…はあ。(ため息) 今日中にあの仕事が終わらないとまずいんだけどなあ。」

豊田 「ねえ、今は仕事のこととは忘れてみない？」

沢渡 「そんなことできないですよ！ わたしがやらないと…。」

奈々 「できないんだ。能なしだね。」

沢渡 「むしろやる気出してるのになんで否定してくるんだよ！」

豊田 「奈々！ 出て行ってもらうけど。」

奈々 「(豊田に)「めんなさい。」

沢渡 「わたしに、ではないんだ…。」

北見、入ってくる。

北見 「すみません！ 遅くなりました。」

奈々 「あ！ 北見。」

北見 「奈々。」

奈々、北見に駆け寄る。

奈々 「北見、元気？」

北見 「元気だよ。」

奈々 「北見、調子いい？」
北見 「調子？ もちろんいいよ。」
沢渡 「何、この差！」

北見、沢渡に気づき、

北見 「あ、こんにちは。」
沢渡 「こんにちは。」
奈々 「なんか態度違うくない？」
沢渡 「全然違うないから！ むしろ違うのそっちだから！」

北見、気にも留めず、

北見 「豊田さん、もしかしてこの人が今回僕の担当する人？」
豊田 「そう、沢渡茜さんよ。 ……あ！ 会えたからデータは必要ないと思うけど、形だけは。」

豊田、北見に手をかざして北見にデータ送信する。

北見 「受信完了しました。」
豊田 「よろしくね。」
北見 「任せてください。でも、何で彼女がここにいるんですか？」
豊田 「実は奈々が偶然みつけて連れてきたのよ。」
北見 「あ、そうなんですね。 ……と、い、うことはまさかイベントエリア外だったり？」
豊田 「そのまさかみたい。聞いてみたらやっぱり雷を誰かと一緒には見えないんだって。」
北見 「ということとは…。」
豊田 「別々などころから来たから到着位置がずれたかと。」
北見 「レアケースか。時間内に会えるかなあ。」
豊田 「北見ならだいじょうぶだよ。」
北見 「まあまだ余裕はありますからね。」
豊田 「それに彼女ならだいじょうぶかと強いて日向も言ってたわ。」
北見 「日向が…。」

北見、沢渡をじっと見る。

沢渡 「なんですか？」
北見 「いや、よろしくね、沢渡さん。」
沢渡 「「ちら」そよろしくお願い…。」
奈々 「(遮って)何「いつ、照れてる」。」
沢渡 「はっ。」

奈々 「赤くなってるし。」

沢渡 「照れても赤くもなっていないから！ もう、ほんとにいつ何なんですか？」

北見 「(豊田に)じゃあ、行ってきます。」

豊田 「行ってらっしゃい！」

奈々 「北見、またね〜！」

沢渡 「ついに全員スルーか！」

北見、出ていく。

豊田 「あ、一緒に行つて。」

沢渡 「えー！」

奈々 「早く行けつて。」

沢渡 「・・・はい。」

奈々 「あと、もう来ないでね。」

沢渡 「二度と来るかつ！ あ、豊田さん、お世話になりました！」

沢渡、走って出ていく。

奈々 「行っちゃった。つまんない。」

豊田 「だったらもつと優しくしてあげなさい。」

奈々 「それは難しい話だにや〜。」

豊田 「でも、奈々も北見たちのお仕事やりたいんですよ。」

奈々 「その時は優しくするもん。そんなことよりちゅるはまだ残ってたよね？」

豊田 「そんなに食べてばかりいたらさすがに太るわよ〜！」

奈々 「ちゅるるは飲み物だからだいじょうぶ。それに今から出かけるからカロリーのにはさーらにマイナス〜。」

奈々、出て行く。

豊田 「今日に行くところがあるから早く帰ってきなさいよ！ 全くもう。・・・沢渡さんたちは無事に会えるのかしら。北見、がんばって〜！」

暗転。

9 場

外。

北見、沢渡、出てくる。

北見 「…沢渡さん、最近どう？」

沢渡 「いきなり何ですか？」

北見 「いい人、いるんじゃないの？」

沢渡 「そんな暇、ないですよ。社畜ですし。」

北見 「社畜？ …はよくわからないけど、忙しいの？」

沢渡 「最近は何日終電ですよ。今日も誕生日なのに…。」

北見 「終電？ …はよくわからないけど、そんな日でも働いているんだ。日向みたいだね。」

沢渡 「あの、日向さんって…。」

北見 「あー、僕らがお手伝いしてあげてるコなの。仕事とはいえ人の世話ばかり焼いてて…。」

北見、ふつと黙る。

沢渡 「…北見さん？」

北見 「いや、何でもないよ。」

沢渡 「…そういえば北見さんって、普通の人、ですよな？」

北見 「僕？ 妖精だけ。」

沢渡 「妖精？…」

北見 「相手の西野と違って、僕は羽のないタイプだからわかりづらいよね。」

沢渡 「えー！ えー！ やっぱ羽ついているの？」

北見 「僕じゃなくて、西野がね。」

沢渡 「西野でもなんでも…」

「まあ確かに羽がないタイプの妖精はこの辺にはほとんどいないんだ。あ、羽があってもしまえる人もいるよ。クラスが上の場合とか。妖精じゃないんだけど田中さんみたいだね。」

沢渡 「へえ…。あ、猫耳はなんなんですか？」

北見 「奈々のこと？ あれは猫。」

沢渡 「…へ？」

北見 「猫。だから猫耳がはえてるんですよ。」

沢渡 「そうですね…。」

北見 「そんなことより急がないと。雨が降りそうだな。」

沢渡 「あの、ど「に」行「う」としているんですか。」

北見 「雷神。」

沢渡 「ライジン?」

北見 「雷の神様だよ。」

沢渡 「あー。教科書で見ただけがあります。」

北見 「教科書? …はよくわからないけど知ってるなら話が早そうだな。おそろくもうじき雷が鳴るから、雷神のところに行つて雷を止めてもらいたい。」

沢渡 「え?」

北見 「君には彼を説得して雷を収めてほしいんだ。じゃないとずっと鳴り続けてしまう。」

沢渡 「無理です、無理です。わたしも雷は苦手だから止んでほしいけど、神で

しゅ?」

北見 「だじょうぶだよ。神は神だけど、どこにでもいそうなほんと普通のお兄さん(☆役者に合せて)おじさん」とかでもよい。(だから)。」

沢渡 「だからって神様を説得はできないですよ。神頼みが限界です!」

浅井、出てくる。

浅井 「北見さん。」

北見 「おー、浅井。元氣?」

浅井 「ええ、まあ。」

北見 「あのさ、日向今どこにいる?」

浅井 「1時間くらい前に田中さんに呼ばれてたけど。」

北見 「それから?」

浅井 「さあ。でもどこかで仕事してんじゃないですか? あの人は仕事しかないので。」

北見 「そうだね…。浅井は何してるの。」

浅井 「田中さんに頼まれてちょっと。パシリばっかですよ。」

北見 「そっか。せつかく天使に生まれたんだから昇格テストを受ければいいのに。」

浅井 「嫌ですよ。日向だってパシリ卒業かと思つたら結局田中さんに使われているうえに忙しいじゃないですか。」

北見 「いや、あの」は自分で忙しくしているだけだから。」

浅井 「ふうん。」

浅井、何か言いたげに北見を見る。

北見 「え? なに?」

浅井 「いや、別に。じゃあ行きます。田中さんうるさいんで。」

北見 「うん。がんばつて。」

浅井 「ははは。がんばりませんから。」

浅井、来た方と逆方向から出ていく。

沢渡 「あの人、羽ありましたね。」

北見 「あー、そうね。」
沢渡 「同じ妖精でもやっぱインパクトありますね。」
北見 「え？ ああ、彼女は天使。」
沢渡 「天使？！ 天使もいるんですか？」
北見 「うん。」
沢渡 「確かにあの羽は天使っぽいけど。じゃあ日向さんも天使なんですか。」
北見 「日向？！」
沢渡 「……？ わたしさっき日向さんに会ったんです。彼女も同じようなタイプの羽がありました。」
北見 「彼女は、神だよ。」
沢渡 「神！」
北見 「神と言ってもいろいろあってね。日向の場合は昇格テストを受けて合格した天使上がりなんだ。」
沢渡 「へえー。神って後からなれるものなんですね。」
北見 「……妖精も、変わればいいんだけどな。」
沢渡 「え？」
北見 「いや、なんでもない。行こう。」
沢渡 「はい。」
北見 「でも、その前に探さないといけないんだよ。」
沢渡 「何をですか？」
北見 「君と一緒に行く人をさ。」
沢渡 「北見さんは？」
北見 「僕は途中までしか行かないよ。」
沢渡 「えー！」
北見 「心配はいらないよ。その人がいればいいんだから。イベントエリアに入ればすぐみつか
るだろうし。それにしても日向、どっいつつもりなんだろう。」
北見、何かを思い浮かべるような表情で遠くを見る。
沢渡、北見を見る。
北見、沢渡の視線に気づいて、「まかすように、」
北見、沢渡、逆方向から出ていく。
北見 「行こうか。」
沢渡 「はい。」

外。

西野、穂高が出てくる。

穂高 「どこまで行くんだよ!!」

西野 「え?」

穂高 「え?、じゃなくて! いい加減!!」がど!!「かくらい教えてくれてもいいじゃないか。」

西野 「あー。」

穂高 「あー、じゃなくて!」

西野 「穂高ってもてるの?」

穂高 「え?! いやー、どうだろう?」

西野 「じゃあ、イケメン?」

穂高 「そういうことは自分で言わないで、例えば君が判断するんだろう?」

西野 「あー。」

穂高 「だから、あー、じゃなくて!」

西野 「でも穂高って彼女いないんですよ?」

穂高 「待て! 顔にそこまで自信はないけど、お世辞程度には言われてもいいはずだぞ。」

西野 「なにが?」

穂高 「・・・もついい。お察しの通り彼女もいないし。」

西野 「だいたいぶぶだよ。」

穂高 「なにがだよ。」

西野 「なんでもー。西野にお任せ!」

穂高 「ははは。・・・じゃあ帰らせてくれ!」

西野 「え、もう降参なの? だらしない男だな。」

穂高 「悪かったな。」

西野 「彼女かわいそう。」

穂高 「だからいねえし!」

西野 「あ、そっか。」

穂高 「あー、もう! 全然噛み合わねえ。他に誰かいないのかなあ。早く帰りたい・・・。」

浅井、出てくる。

浅井 「西野。」

西野 「浅井だー。よく会うね。」

浅井 「まあ、ね。・・・そいつってもしかして。」

西野 「穂高!」

浅井 「いや、そいついついかにじゃなくて。」

穂高 「・・・あの。」

浅井 「あ？」

穂高 「羽、だよ。本物？」

浅井 「それがどうかしたの？」

西野 「わたしも聞かれたの。失礼だよね。」

浅井 「まあ、そういう顔してるよね。」

穂高 「そっこのほうが失礼だろう！」

西野 「ねえ、浅井、今日北見に会った？」

浅井 「あー、ついさっき。」

西野 「ほんとに？！」

浅井 「そりや会うこともあるでしょ、この狭い世界。」

西野 「わたしなんてもう2時間くらい探してるのに会えないんだよ。」

浅井 「たまにはそういう日もあるよ。」

西野 「ううん、今まで仕事中にそんなことなかったもん。」

浅井 「仕事中か。でも北見さんは日向を探してたみたいけど。」

西野 「もう！ すぐヒトを頼ろうとするんだから。」

浅井 「いや、北見さんはたぶん日向に会いたい。」

西野 「え？」

浅井 「種族違う上に格までも違っちゃったのに。」

西野 「え？ え？」

浅井 「まあいつの時代も格差婚がないことはないけど、やっぱり……」

西野 「(遮って)ちよつと待って！」

浅井 「何？」

西野 「北見って、まさか日向が好きなの？！」

浅井 「明らかでしょ、本人は隠しているつもりなんだろうけど。 ……何、複雑な顔してるのよ。」

西野 「え、そっかな？」

浅井 「まあ身内の恋愛話ってあまり聞きたくないか。」

西野 「身内じゃない、けど、うーん、身内のようなものかなあ。」

浅井 「ふわふわしてるな……。それにしても日向のどこがいいんだか。田中さんも狙ってるみたいだし。」

西野 「えー！ 肝心の日向は？」

浅井 「あいつは気づいてない。仕事しか見えてないから。」

西野 「そっかなー。日向って……。」

浅井 「あちらこちらで油を売ってるけど、やることは早いし正確なんだ。悔しいこと。」

西野 「ふーん。でも、北見はそもそも叶わない恋ってやつだよ。異種族間恋愛は禁忌でないけど常識的にダメでしょ。」

浅井 「あー、もしかすると……。」

穂高 「(遮って)おいっ……いつまでヒトの恋バナで盛り上がってんだよ。」

西野 「忘れてたー！」

穂高 「頼むよー！」

西野 「そう言われても……。」

浅井 「そういえば北見さんもなんか変なの連れてたよ。」

西野 「よかつた。浮ついてばかりいないでちゃんと仕事はしてるんだ……。」

浅井 「相変わらず辛口……。」

西野 「浅井の方がきついなと思う。」

穂高 「(っ)ぶやくま(っ)どっちもま(っ)ちだよ。」

西野・浅井 「は……。」

穂高 「すみません、何でもありません。」

浅井 「ふん。……じゃあ、行くわ。田中さんうるさいから。」

西野 「またね。」

浅井、出ていく。

穂高 「ねえ、羽って何種類あるの。」

西野 「さあ。ねえ、さっきから羽羽って、そんなに羽がめずらしい？」

穂高 「めずらしいっていつか、え？ なんてあるの……？」

西野 「妖精だから。」

穂高 「妖精……？」

西野 「そうだよ。浅井は天使だけど。」

穂高 「まじで……。」

西野 「もう、行くよ……。」

西野、出ていく。

穂高、立ちつくしていたが、

穂高 「おいっ！ 待ってくれよ……！」

穂高、出ていく。

暗転。

海老名の家(兼オフィス)。

明転。

田中、海老名がトランプで遊んでいる。

海老名の横にはテレビのリモコンのようなものがある。

海老名

「遅いね。」

田中

「日向が強引に引き入れたから時間がかかってんじゃないですか？俺だったらいくら思いが通じ合った瞬間であっても、ふたり一緒のタイミングでなければ岩戸を開かないのに。これだから新米神様は……。」

海老名

「じゃあ別々でいるってこと？」

田中

「そうだと思いますよ。」

海老名

「出会えるの？」

奈々、二人が話している間に入ってくる。

田中

「まあ豊田さんに仕えている妖精たちがいれば心配ないですよ。最近猫娘もいるし。」

奈々

「猫娘？」

田中

「それにしてもモン・プチモン・プチってよく言ってるけど、あれ、そんなにうまいのかなあ。」

奈々

「ネスレ日本(ニッポン)に謝れ！」

田中

「は？え？あー！」

田中、トランプをばらまきながら奈々を見る。

ふたり、にっこりと笑いながら見つめ合っつ。

田中

「ぼ、僕、猫耳大好きです♡」

奈々

「それはどうも。トスの田中さん。」

田中

「へっ。」

奈々

「いつも西野ちゃんが言ってるけど。(真似しながら)田中さん、トスだからね♡、っ。」

海老名

「へえ、田中ってそういうの？」

田中

「違うから！それにsとか言っつのもやめてくれるっ。rのお芝居を子どもが観てたらどうするんだよ。」

奈々

「遅かれ早かれ知る道だと思っつけど。」

田中

「変態ー！」

奈々

「えー、田中には言われたくない。」

田中 「俺はその辺りはノーマルだから！ あー、もう！ 西野は一度お灸を据えてやらないとだめだな。」

奈々、海老名、普通に引いている。

田中 「え？ え？」

奈々 「…もしかして西野ちゃんと付き合ってるの？」

田中 「は？ 妖精と付き合えるわけないでしょ… あ、もしかして言葉に字面以外の意味があるの知らないだろ？！ いいか、お灸を据えるというのは…。」

海老名 「(遮って) そうだ！ 西野ちゃんを豊田ちゃんに頼んで魔法で変えてもらえばいいじゃん？ 豊田ちゃん、かわいいうえに優しいから、ダーマ神殿への申請から天使界に許可を取るまで全部やってくれるよ。ほんといいことだよね。」

田中 「それ、魔法使いの業務の範疇ですからね。って、だから西野とは付き合ってますんから！ 俺、…別にいるので。」

奈々 「えー何それー。早く言っとよ。いつから付き合ってるの？」

田中 「あ、いや、付き合ってる…。」

奈々 「じゃあ何？ もしかして？」

田中 「一方通行だよー！」

海老名 「誰？」

田中 「そんなの、どつでもいいじゃないですか。」

海老名 「えー、気になる。誰、誰。俺知ってる？ (トランプ持って) ゲームやめて恋占いしちゃおう。」

浅井、三人が盛り上がっている間に入ってくる。

浅井 「仕事時間中に自分の恋バナで盛り上がる上司。キモっ。」

田中、海老名、奈々、浅井を見る。

田中 「お、なんだよー！」

浅井 「田中さんに言われたことをやって、その報告に来たのに失礼じゃないですか。」

海老名 「浅井ちゃん、お疲れ。」

浅井 「お疲れさまです。」

奈々 「…え、田中、もしかして？」

浅井 「あー、あたしのことじゃありませんよ。」

海老名 「そうなの？」

田中 「おまえ、何を知ってたよ！ …まあ確かに浅井じゃないけど。」

浅井 「はい、田中さんが日向を好きなのなんて職場のみんなが知ってるんですよ。」

田中・奈々・海老名 「えーっ！」

浅井 「日向以外は。そんなことよりも報告です。やっぱりひとりが所定の位置にいなかった

らしいのですが、西野も北見さんもちゃんとふたりに付いたので心配しないでくださいよ
うぶかと思えます。まだお互いを探すのに苦戦してるみたいですけど、もうじき会え
るはずです。」

田中 「お、おう。」

浅井 「じゃあ、わたし豊田さんの所に行ってきます。(ダム)神殿経由で呼ばれたので。」

田中 「・・・お、おう。お疲れさま。」

海老名 「浅井ちゃん、またねー。」

浅井 「失礼します。」

浅井、出ていく。

海老名 「・・・なに？ そっいうことー。」

田中 「あり得ねえ、あいつ。まじかよ。」

海老名 「日向って田中の部下でしょ？ しかも天使から上がったんだよね。種族どころか格差
もなくて文句言う余地全くなしー！」

田中 「もう勘弁してくださいよ。」

奈々 「いーじゃん、いーじゃん。」

田中 「つていうか、俺そんなわかりやすくはないですから。」

奈々・海老名 「(満面の笑みで)うん、うん。」

田中 「・・・あー、早く来ねえかな。」

海老名 「とりあえず、もうひと試合やりませんか。今度は奈々ちゃんも一緒に。」

海老名、戻ってトランプを集め始める。

奈々 「あ、でもあたしもそろそろ戻らないと豊田に怒られるかも。」

海老名 「そうなの？ やりながら田中に詳しく聞かせてもらおうと思ったのに。」

奈々 「じゃあひと試合だけ。」

田中 「やめてくださいー。」

奈々 「やっぱ恋占いにしようやー。」

海老名 「田中ちゃんと日向ちゃんの恋の行方と相性どっちがいい？」

奈々 「うーん、・・・。」

田中 「ほんとやめてくださいー。」

暗転。

外。

明転。

北見、沢渡、が出捌け口(中央)の手前にいる。

北見 「ここも入れないのか。あとどこが残ってるんだ？ そろそろ時間的にやばいっていうのに……。」

沢渡 「さっきからどうしたんですか？」

北見 「イベントエリアに通じる箇所がどういことかどこも通り抜けられなくなっている。」

沢渡 「そこに行かないと帰れないんですか？」

北見 「うん、そこに君の相手がいるからね。」

沢渡 「わたしの相手？ ……あの、できればもうこれ以上人には関わりたくないです。ここはわけわからない人ばかりで……北見さん、一緒に行けませんか？」

北見 「うーん、そういうわけにはいかないなあ。」

沢渡 「そんな……。」

穂高、出捌け口後ろを通過する。

沢渡、穂高を見て、

沢渡 「あ、穂高！」

北見 「え？」

北見、出捌け口を見ると西野が通過する。

沢渡、出捌け口に駆け寄って、進もうとするがはじかれる。

沢渡 「！ ……穂高！ 待って、穂高！」

北見、沢渡を制止してその前に出て、

北見 「西野！」

北見、反応を得られずそのまま沈黙する。

沢渡、その間に崩れ落ちる。

北見、はっとしたように振り返り、

北見 「沢渡さん、だいじょうぶ？」

沢渡 「……。」

北見 「今の人、穂高さんは知り合いなんだね。」

北見 「はい……。」

北見 「僕の声も西野に届かなかったし……。どうして」となんだ。」

沢渡 「(呟くように)……帰りた〜い。」

北見 「えっ？」

沢渡 「もう嫌だ、こんなところ。帰りた〜い……」

北見 「沢渡さん！ 落ち着いて。だいじょうぶだから。」

沢渡 「何がだいじょうぶなんですか！ もう1時間以上歩いていますよ。なのに何も進んでいないじゃないですか。おかしいと思いませんか？」

北見 「そっだよね。」「めん……。」「

沢渡 「あ……。わたしこそめんなさい。北見さんも一緒に気持ちなのに。」

北見 「いや、僕の方が及ばないからだよ。本当に申し訳ない。でもどうすれば……。」「

日向、入ってくる。

日向 「あ……」

沢渡・北見 「あ……」

日向 「どうしよう、まさか出くわすなんて。」

北見 「日向。」

日向 「北見さん、お疲れさまです。」

北見 「お疲れさま。日向、これはどうして……」

日向 「えっ？」

北見 「どうして聞いてみるの。」

日向 「どうして……っ？」

北見 「いつまで経っても西野たちと合流できないんだけど。この世界に入れたのは日向なんだから、ヒントくらいくれてもいいんじゃないっ？」

日向 「えっ……。ああ、沢渡さんの到着地点がずれていたことですか？ ふたりが離れていてあんなにお互いを思い合う瞬間ってないと思っただんですよ。それにこれがうまくいけば北見さんは……。」「

北見 「なにっ？」

日向 「いえ、……どういつ時こそがんばるとレベルアップに繋がると思いませんか？」

北見 「いや、僕は日向たちと違ってレベルアップとか意味ないから。」

日向 「そういうのは関係なく高みを目指さなきゃダメですよ。仕事のできる人って素敵じゃないですか。あ、もちろん北見さんがいつもきっちり仕事をこなしている」とは知っていますけど。」

北見 「そっけいっの、本当に要らないから…… 所詮妖精は日向たちのようにはなれないんだから……」

日向 「え……。」「

北見 「あ、」「めん……。」「

日向、走って出て行く。

北見 「日向！……どうしよう。こんなのただの八つ当たりだ……。」

沢渡 「北見さん、ごめんなさい。わたしが取り乱したせいで。」

北見 「いや、沢渡さんは関係ないよ。これは僕の問題だ。それに沢渡さんが不安になるのは当然なのにもっと気を遣うべきだったよね。」

沢渡 「そんなことないですよ。北見さんは十分優しくしてくれていますよ。」

北見 「いや、これでは社会人としてもヒトとしても失格だ。」

沢渡 「……北見さんは、人じゃないですよ。」

北見 「そっだ、妖精だった。」

沢渡、北見、笑う。

北見 「よかった、沢渡さんが笑ってくれた。」

沢渡 「北見さんも笑ってくれてよかったです。」

沢渡、北見、照れたように見つめ合う。

北見 「と言ってもほんとにどうすれば君を返してあげられるのか……。」

北見、ひとり悩み始める。

沢渡、優しく北見をみつめているが、ふとアクセサリーを手にして、

沢渡 「穂高……。」

地鳴り音が響き始める。

沢渡 「えっ？」

沢渡、北見、顔を見合わせる。

閃光、もしくは全面光(可能な限り目撃)。遅れて爆発音。

沢渡 「きゃーっ……(叫ぶ)。(」

北見 「(同時に)わーっ……(叫ぶ)。(」

暗転。

外。

明転。

穂高、西野がいる。

西野 「なんかすごい音がしたね。」

穂高 「あ、ああ。…西野って、ほんとマイペースだな。」

西野 「穂高に呼び捨てにされるなんて、むかつくー。」

穂高 「俺の事、最初から呼び捨てにしておいて何言っただよー！」

西野 「穂高とわたしは違うから。」

穂高 「納得いかねー。」

奈々、おやつを手に出してくる。

奈々 「こんなところで誰がイチヤイチャしてるのかと思ったら…。」

穂高・西野 「イチヤイチャしてないからー！」

穂高 「って今度は猫耳？！でも君、人間だよね？」

奈々 「は？ 見ての通り猫だけど。」

穂高 「猫…。」

奈々 「猫だから猫耳があるんでしょ。あんたどういう世界で生きてきたのよ？」

西野 「どうせ、にゃん♡にゃん♡とか言うかわいい♡がいるところに入り浸ってたんだよー。」

奈々 「あー、田中と同じタイプか。これだから非モテは…。」

穂高 「違うから！ 田中さんのことは知らないけど彼も絶対違うから…！」

西野 「そんなことより北見見なかった？」

奈々 「え？」

西野 「浅井がついさっき見たって言うてから1時間は経っているのにまだ会えないの。このままじゃ間に合わないよー。」

奈々 「そのことなんだけど、日向が…。」

西野 「もう…こっちがこんなに探してるのにやっぱり日向なんだ。」

奈々 「ん？ なんかあったの？」

西野 「ないけど、仕事中なのに、こんな時なのに日向日向って…。」

奈々 「何、北見と喧嘩でもしたの？ それともまさか日向とっ？」

西野 「…してない。」

奈々 「そう。それなら話戻すわ。日向がさ、北見って飛んできて。」

西野 「日向も…、飛んで…。」

奈々 「いや、ほんとに飛んできてはいないけど。なんであんたたちは羽があるのに飛ばないのよ。」

西野 「疑問点はそこじゃない。」

穂高 「(奈々に)やっぱ飛ばないの??と思うよな。」
西野 「(叫ぶ)そ「じゃない!」」
穂高 「俺に対する当たりの強さ! いや、どうしたんだよ。西野は傍若無人だけど自分のいらだちをぶつけるような奴じゃないだろう?」
西野 「いらだつてなんかないもん! 第一穂高にわたしの何がわかるの?」
奈々 「西野!」
穂高 「…知った風な口利いてごめん。確かに出会って数時間でわかるわけないよな。でも俺、西野と歩いているとダメージ受けるばかりだけど、今はこの状況をそれなりに楽しんでる。それは西野が本気で人を攻撃する嫌なやつじゃないって思うからなんだ。」
奈々 「…ふーん、そういうのが好きなんだ。あんたほんとに田中と同じタイプじゃない。」
穂高 「だから違うから! 田中のことは知らないけど彼もほんとに違うから!」
西野 「(眩くよろこ)「めん。」」
穂高 「え?」
西野 「「めんで言ってるの!」」
穂高 「お、おつ。…なんか調子狂うな。」
西野 「なによ、めんどくさい男だな。」
奈々 「はいはい、なんとなく落ち着いたところで話の続きね。あたし、今回は豊田の使いで来たからちゃんと聞いて。」
西野 「うん。奈々も「めんね。」」
奈々 「いって。みつからなくて焦っただけでしょ。日向もものすごく焦っていたし。…それで日向が言うには、今回のコは転送先がずれてイベントエリア外に到着しちゃったって。」
西野 「そんな」とめるの?」
奈々 「岩戸を本当に開けるべきタイミングで開けなかった時とか。」
西野 「あー。」
奈々 「今納得するところあった?」
西野 「…う、うん。」
奈々 「誤魔化すの、へたくそか。」
西野、ふくれる。

奈々 「で、そういう時は変な所に入ることがないよう全てのエリアにロックが掛けられるんだって。と言ってもパスがないと入れなくなるのはその人と案内人だけらしい。」
西野 「わたしたちパスのことなんて知らないよ! …じゃあまさか今回は最初から失敗だったって?」
奈々 「うーん、日向は彼女ならだいたいようぶと言っていたらしいから、彼女のパスはあったみたい。発動するには条件があったらしいけどね。」
西野 「そんなの気づかないよ。実際…」
奈々 「だから日向もパスが何か、ヒントをメモして託したらいいんだけど、北見がそれに気

「づいてないんじゃないかって思って、」

穂高 「飛んできたわけか。」

西野 「話の内容わかってないよね?」

奈々 「まあまあ。でもさっきイベントエリアへのロックが解除されたみたいだから今度こそ会えるんじゃない。」

西野 「もしかしてさっきの轟音が?」

奈々 「うん。じゃあ、あたしはこれでお仕事終わったから海老名さんとこ行ってくるわ。」

田中と三人でトランプするんだ。」

西野 「いいな——」

奈々 「あんたも仕事終わったら来ればいいじゃん。」

西野 「行きたいけど、今日は豊田さんに終わったら戻ってきてって言われてるんだ。北見と

一緒に出掛けたいんだって。」

奈々 「あたしも豊田に出かけるから早く帰ってくるように言われたんだけど、そのまま海老名のところに行くって出てきちゃった。」

西野 「だいじょうぶなの?」

奈々 「平気平気——」

奈々、出て行くこととするが立ち止まり、

奈々 「西野、そろそろ兄貴離れた方がいい頃合いかもよ。」

西野 「え?」

奈々 「魔法使いのところの猫の勘。じゃーね!」

奈々、出て行く。

穂高 「西野はやっぱり妹なのか。そういうキャラだよな!」

西野 「……いないよ。」

穂高 「え?」

西野 「長女だよ。弟がいる。」

穂高 「そうなの?」

西野 「奈々も知ってるはずなのになんで……?」

穂高 「行こつぜ。北見ってやつともう会えるんだろ?」

西野 「……うん。」

穂高、西野、出て行く。

暗転。

14場

外。

12場終わりの状態を再現。

沢渡、北見がいる。

(時間が巻き戻る音。)

爆発音。

沢渡 「きゃーっ!!(叫ぶ。)

北見 「(同時に(わーっ!!)叫ぶ。)

明転。

豊田、現れている。

沢渡 「・・・豊田さん?!!」

北見 「どうしました? あ、もしかして僕がやらかしたことを・・・。」

豊田 「日向から聞いたわ。」

北見 「そうですね。やっぱり神に立て付くなんてただじゃ済まないですよね・・・。」

豊田 「違うの、北見。あなた、沢渡さんのデータにまだ目を通してないんじゃない?」

北見 「あ! すみません。」

豊田 「ううん、わたしがする必要ないかもと言って慌ただしく渡してしまったから。」

北見 「今見た方がいいんですよね。」

北見、手を目の前にかざす。

豊田 「うん、2ページめだけでいいわ。」

北見 「え? 2ページもあるなんてめづらしいですね。あれ? 手書きメモだ。この字は日向・・・、あー!」

豊田、にじりりと近づいてくる。

北見 「沢渡さん。・・・って、あれ? 荷物はどうしたの?」

沢渡 「え?」

北見 「もしかして豊田さん家(ち)に忘れてきちゃった?」

沢渡 「いえ、最初から持ってないです。」

北見 「え? ほんとに?」

沢渡 「ほんとです。」

北見 「ポケットには・・・?」

沢渡 「何も入ってないですよ。(そもそもポケットについてない。 ☆衣装に合わせて追加。)

北見 「と、いうことはあれもないってことか……」

沢渡 「あれ、ってなんですか……」

豊田 「北見、あれはともかく先に今の話を解決しましょう。」

北見 「すみません。でも……」

豊田 「そこには持っている物とは書いてないですよ。」

北見 「あ、そうか。じゃあ今誰かに」もらったもの「はあるっ」

沢渡 「……もしかしてこれ、ですか？」

沢渡、アクセサリーを見せる。

沢渡 「そういえばさっき」れを見たらすい音が……。」

豊田 「イベントエリアへのパスとしてそれが指定されていたみたいね。」

北見 「すみませんでした。やっぱり仕事はきっちりやらないとダメですね。」

豊田 「わたしも気をつけるわ。」

北見 「わざわざありがとっ」ざいました。」

豊田 「いえいえ。実はね、さっき日向がものすい勢いで家に飛び込んできて。」

北見 「日向がっ」

豊田 「北見が2ページめがある」とに気づかなかったかも、ってわんわん泣いていて。あの」

北見 「とは長い付き合いだけ泣いてるのは初めて見たから、よほど責任を感じたのね。」

豊田 「……。」

北見 「あと、はやっぱり北見……。」

北見 「えっ？」

豊田 「ううん、何でもないわ。さて、わたしは帰るわね。浅井とお話し中なのよ。と言っても浅井は今日向を元気つけているって」るだと思っ」けだ。」

浅井、入ってくる。

浅井 「豊田さん。」

豊田 「あら、噂をすれば。」

浅井 「悪い噂ですか？」

豊田 「とんでもない。」

浅井 「あの、日向を連れてきました。」

豊田 「いいタイミング。」

浅井 「日向。」

日向、おすおすとお入ってくる。

浅井 「もう、元気出して行っておいでよ。」

日向 「……うん。」

豊田 「じゃあ、わたしたちは戻ってさっきの話を準備をしましょう。」

北見 「ありがとうございます。浅井も、ありがとうございます。」

浅井 「お気になさんず。」

豊田、浅井、出て行く。

引き続き、外。

日向 「あの、北見さん……。」

北見 「(遮って)日向、「めんめん……」

日向 「いえ、わたしが……。」

北見 「(遮って)ほんと「めん」。イベントも既にもらっていたというのに気づけてなくて。」

日向 「いいえ。わたしこそ空気読めてなくて嫌な思いさせちゃって。すみませんでした。」

日向、手を差し出す。

北見、おそろおそろ日向の手を取る。

日向、「(っ)っ(っ)として握手をする。」

日向 「雨降って地固まる、ですね。もうこのことに関しては言いつくしなですよ。」

北見 「うん。」

日向 「さて、これであとは西野ちゃんたちをみつけるだけです。」

北見 「さっきあそこから西野たちを見かけたよ。あまりにみつからないから仕事もせずにふわふわしてるんだらうと思ったけど、意外とちゃんとしてた。」

日向 「あはは。」

沢渡 「羽があるから、ふらふらじゃないんだ……。」

日向 「北見さん。」

北見 「ん？」

日向 「実は今回豊田さんから北見さんがレベルアップできるように難題を用意できる？と言われました。もしかしたらすごいことを任せられちゃうのかもしれないですよ。」

北見 「なんだよそれー。仕事が大変になるのは勘弁なんだけどなあ。」

日向 「さぼり方なら教えます。」

北見 「え……？」

日向 「あと、あれは今回はこの「G」がすでに彼に渡しているので西野ちゃんに会えれば後は海老名さんのところに行くだけです。」

北見 「なんだー。」

日向 「安心した？」

北見 「した。」

日向 「じゃあ、「G」の任務中に会ってしまったことは田中さんに内緒にしてください……」

北見 「だめなの？」

日向 「そうなんですよ。怒られるどころか、今回は他にいろいろあって始末書の可能性がありませぬ。」

北見 「待ってー！ 共犯感がやばくないっ……」

日向 「そ「G」を北見さまの温情で何とかか……」

北見 「……まあ他ならぬ日向の頼みと……」とで今回だけは、ね。」

日向 「ありがとうございます♡」

北見、大照れするが、我に返り、

北見 「それにしてもどうりで今まで会わなかったわけだ。まあどういって聞きたいって思ったのは今初めてだったけどね。」

日向 「イベントエリア外スタート自体がレアですからね。しかも中に入れないというスペシャルレアケース！でも彼女たちだけでなくわたしたちの仲も深まるならば、これは運命的なものだったりするのかもしれないね。」

北見 「え！」

日向 「え？」

沢渡 「運命……。」

日向 「え？」

沢渡 「いえ。」

日向 「あの、沢渡さん。」

沢渡 「はい？」

日向 「がんばってくださいね。」

沢渡 「……はい。ありがとうございます。日向さんも……。」

日向 「え？ あはは、そうね、あなたたちのためにもわたしはもっとがんばらないと！じゃあね。北見さんは、またね。」

北見 「うん、またね。」

日向、出つく。

北見、ずっと見送っている。

沢渡 「北見さんはほんとに日向さんが好きなんですね。」

北見 「え！ な、何言ってるの、急に。」

沢渡 「短時間ですけど、わたしも北見さんのことをそれなりに見ているのでわかります。」

北見 「いやいや、日向は天の使いから天側に格が上がってしまったんだ。種族どころか格まで違つのに、そういう気持ちを僕が持つてゐるわけじゃない。」

沢渡 「そういうものなんですか。」

北見 「うん、そういうものだよ。それに日向は結局仕事仕事だから。」

沢渡 「それにしても鈍感とかなんというか……。」

北見 「うん。ほんとあのうってば鈍感で困るよね、って、何言わせんのよ？」

沢渡 「あははは。でもあれは天然小悪魔ですよ。天使なのに。」

沢渡、北見、顔を見合わせて笑う。

北見 「さあ行こう。あと少しだから。」

沢渡 「はい。」

北見 「タイムリミットまであと1時間切っちゃったからね。」
沢渡 「リミットがあるんですか？」
北見 「退社時間までって決まってるの。就業時間外は働かないものでしょ？ さあ、急いで。」
沢渡 「いいなあ……。」

北見、沢渡、出捌け口(中央)から出ていく。

外。

西野、穂高が入ってくる。

穂高 「ずっと背負っているとさすがに肩凝るなあ。」

西野 「男のくせに荷物なんて持ってくるから。」

穂高 「リュックがそんなにおかしいか？」

穂高、立ち止まってリュックを降ろす。

西野 「何が入ってるの？」

穂高 「いつまで経っても人の話聞かねえな！」

西野、穂高のリュックサックを開いて中を覗き始める。

穂高 「おい、何やってるんだよ！」

西野 「あ！」

穂高 「なに？」

西野、沢渡の折り畳み傘を出す。

西野 「これ……。」

穂高 「傘？」

西野 「何で持ってるの？」

穂高 「何でつてそりゃあ……え？ 何でだろう。」

西野 「は？」

穂高 「しかも女性用じゃん。」

西野 「誰にもらったの？！ 自分のじゃないでしょ？」

穂高 「うん。……あれ？ ほんと何で俺がこんな傘を持ってるんだろう。」

西野 「えー！」

北見、沢渡が入ってくる。

沢渡 「あ！ 穂高！！」

沢渡、駆け寄る。

沢渡 「よかった！ やっと穂高に会えた！ もう会えないと思ったよ。さっきは呼んでも……」

穂高 「(遠慮がちに遮って)誰？」
沢渡 「え？ 沢渡だよ？」
穂高 「沢渡？」
沢渡 「うん、沢渡茜……。」
穂高 「(西野に)知ってる？」
西野 「え?!」

全員、黙り込む。

北見 「……とりあえず西野、お疲れ。」
西野 「お疲れさま。やっと会えた。」
北見 「今回はかなりイレギュラーっぽい。」
西野 「うん。奈々から聞いた。北見の「とずー」と探してたんだよ。」
北見 「それに関しては本当にごめん。」
西野 「もうくたくださいよー。あー、糖分補給したいなー。」
北見 「セブンスイレブンのスイーツと「コーヒー」でいい？」
西野 「色気ないなー。もてない男たちはこれだから。」

西野、話しながら穂高を見る。

穂高 「おい！ どさくさにまぎれて俺もデイスるなよ！」
北見 「沢渡さん、彼と知り合い、でいいんだよね。」
沢渡 「……はい。そのはずなんですけど。」
北見 「うん、それならだいたいしょうぶ。ここからは彼とふたりで行ってもらうから。」
沢渡・穂高 「え?!」
北見 「気をつけてね。」
西野 「道は一本道だから。じゃあね。」

北見、西野、捌け口に向かい出す。

沢渡 「待つて、北見さん！」
穂高 「おいっ！ この人も困ってるだろ。なんでふたりともいなくなるんだよ。」
西野 「邪魔者は退散しないとね！」
穂高 「はあ?!」
北見 「沢渡さん、彼と行っておいで。そうしたらちゃんと帰れるから。」
沢渡 「本当に?」
北見 「うん。安心してよ。だいじょうぶだからさ。」
沢渡 「……はい。北見さんが言うんだから、信じます。」

沢渡、北見、見つめ合って微笑む。

西野、意外そうな顔で見ている。

沢渡 「あの、また会えますか。」

北見 「うーん、どうだろう。でも彼がいれば僕はもう必要ないよ。」

沢渡 「そうですか……。」

北見 「じゃあね、沢渡さん。穂高くんも。」

西野 「いつてらっしゃい〜！ 穂高、またね〜。」

穂高 「いや、俺はもう会いたくないから。」

西野 「なにそれ！ 感じ悪っ。」

北見 「ははは。穂高くん、沢渡さんをよろしくね。」

穂高 「……はい。」

北見、西野、手を振る。

沢渡、穂高、出て行くところとするが、穂高が足を止めて、

穂高 「西野！ 仕事がんばれよ。」

西野 「……うん……」

沢渡、穂高、出て行く。

北見 「まさかこういう展開とはね。」

西野 「ほんとだね。ねえ、沢渡さんは穂高のど〜がいいのかな。」

北見 「ははは、西野はほんときびしいね。じゃあ、僕は完了報告に行こうか。」

西野 「日向のとこ入る〜。」

北見 「(真似て)日向のとこ入る〜。」

西野、北見を見る。

北見 「……何っ？」

西野 「別に。」

北見 「何だよ。」

西野 「さあねい〜。」

西野、意味深に微笑んでから、スキップして出ていく。

北見 「まさか、西野も気づいてんの？ 嘘だろ。」

北見、早足で出ていく。

外。

沢渡、穂高、入ってくる。

沢渡 「穂高、……さん。」

穂高 「穂高でいいよ。そう呼んでたんだろう？」

沢渡 「うん……。穂高。」

穂高 「うん。」

沢渡 「ほんとにわたしのこと覚えてないの？」

穂高 「沢渡さんだっけ？ ごめんね。知り合い、なんだよね？」

沢渡 「同期で同僚。」

穂高 「会社繋がりがあ。俺、ここの世界はどこなんだよ、って思うくせに、元いた世界の記憶が曖昧なんだよね。」

沢渡 「そうなんだ……。結構ふたりで飲みに行ったりしてたんだよ。酒飲みがおまえくらいしかないって言っつて、よく穂高から声掛けてくれてたんだ。あと、今日はこれ(アクセサリー)……」

沢渡が言い終わる前・手をアクセサリーにやる前に、雷の音。

沢渡 「きゃっ。」

穂高 「雷、苦手なのか？」

沢渡 「そういうわけじゃないけど……。」

沢渡が言い終わる前に、雷の音。

沢渡 「！」

穂高 「苦手なんじゃん。」

沢渡 「いや、外だとさすがに怖くない？」

穂高 「俺は平気だけど。」

大きな雷の音。

沢渡、思わず穂高に手を伸ばす。

沢渡 「ごめん。」

沢渡、手を離す。

雨の音。

穂高 「いいよ、つかまってるよ。」
沢渡 「でも……。」

穂高、折り畳み傘を出しながら、

穂高 「ほら、雨も降ってきたから。傘、ないんだろう？」
沢渡 「うん……。」

穂高、傘を沢渡の方へ差し出す。

沢渡 「ねえ、この傘……。」
穂高 「女性用だよ。なぜ持っていてさ。俺のじゃないと思うんだけどそれも覚えてなくて……。」

沢渡、傘を見上げて黙り込む。

穂高 「……どうした？」
沢渡 「ううん、好みの柄だな、と思って。」
穂高 「そっか。俺も、いいなと思ってたんだ。」
沢渡 「え？」

雷の音。

沢渡、穂高の腕を掴むようにして傘に入る。

穂高 「だいじょうぶだよ、すぐに止むって。」
沢渡 「……うん。」

穂高、沢渡の手を見る。

穂高 「……行こうか。」

沢渡、穂高、出ていく。

雷の音。

暗転。

海老名の家(兼オフィス。)

舞台前方だけ明転。

海老名、田中、奈々、後方の暗がりの中で座ってテレビを見てる。
海老名の横にはテレビのリモコンのようなものがある。

沢渡、穂高、傘を差しながら舞台前方に出てくる。

沢渡 「この、家？」

穂高 「雷神、って神なんだろう？」

沢渡 「うーん、神は神だけど、どこにでもいそうなほんと普通のお兄さん。」

穂高 「おそらく当たらずとも遠からずなんだろうけど、罰当たるぞ。」

沢渡 「わたしが言ったんじゃないからね！」

穂高 「でも、ここも普通の民家だよなー。」

沢渡 「チャイムもついてるし。」

雷の音。

沢渡、反応する。

穂高 「早いところ、お願いしよう。」

沢渡、チャイムを押す動きをする。
チャイムの音。

海老名 「はーい。」

穂高、沢渡、顔を見合わす。

沢渡・穂高 「普通……。」

海老名 「……ん？ 入ったら？」

穂高 「むしろ軽いな。」

沢渡 「うん。」

奈々 「入らないの？！」

穂高 「いえ、お邪魔します！」

穂高、傘を閉じて、

沢渡、穂高、裏を経由して家に入る。

照明、全部点く。

田中 「いらっしやう。」

奈々 「お疲れ。」

沢渡 「奈々！」

穂高 「あの、雷神さんのお宅でしょうか。」

田中 「うん、よく来たね。」

沢渡 「あなたが雷神さん……？」

奈々 「違うよ。」

海老名 「俺だけだ。」

沢渡・穂高 「あー、普通のお兄さん。 ☆心の声。表現が難しい場合は普通、くらいまで口に出す。）」

奈々 「もしかして昔の人の描いた絵をイメージしていたでしょ？」

田中 「はははー！」

海老名 「はははじゃないから！ 毎度結構ショック受けるから！ あと田中さあ、いつも我が物顔で迎えるの止めて〜。」

田中 「ははは、すみません。」

沢渡・穂高 「……田中……」

田中 「えっ？」

沢渡 「いえ、何でもないです。」

穂高 「あの、僕らお願いがあつて来たんです。」

海老名 「俺に？」

田中 「俺に？」

奈々 「あたしに？」

沢渡 「……雷神さんに。」

奈々 「やっぱり海老名さんに。」

沢渡 「海老名さん……。」

穂高 「めっちゃ日本人名だな。」

沢渡 「そもそも妖精も北見さんと西野さんだったよ。」

穂高 「確かに日本だな。」

海老名 「俺たち、日本担当だから名前も言葉もジャパニーズなんだよね。」

田中 「君たちが暮らす頭上に天上界というのが存在していて、それぞれの国の真上にその国の担当がいるというイメージかな。まあどうでもいい話だけど。」

沢渡・穂高 「はあ。」

海老名 「さつきからふたりの息がぴったりじゃない。いいなあ、先の明るいふたりは。」

奈々 「海老名も非モテだからね。」

穂高 「あ……。」

田中 「なんか用だっけ？」

穂高 「海老名さんに。」

田中 「そうだった。」

海老名 「なに？」

穂高 「雷を止めてほしいんですけど。」

海老名 「なんで?」

穂高 「え?」

海老名 「いいじゃん。ふたりの仲が深まったでしょ。」

沢渡 「いえ、困ってしまっ人、っていうか、妖精がいます。」

海老名 「君は妖精が好きなの?」

沢渡 「え?」

田中 「北見か! あいつ結構イケメンだし、人当たりいいからなあ。」

奈々 「うんうん♡」

沢渡 「そういうわけでは...。」

奈々 「じゃあ誰が好きなの?」

沢渡 「そう言われても...。」

海老名 「言っちゃえば。田中くんが叶えてくれるから。」

沢渡 「え?」

海老名 「この人こう見えて、実はキューピッドだから。」

沢渡・穂高 「え!」

田中 「こう見えて、じゃなくて見ての通り、愛の神。エロースなわけよ。」

海老名 「あー、エロースというとしっくりくる!」

田中 「どういう意味ですか!」

穂高 「あの!」

海老名 「なに?」

穂高 「ほんとに叶えてくれるんですか?」

田中 「あー、俺?」

穂高 「はい。」

田中 「もちろん。ここにたどりつけたなら。」

海老名 「俺の家だけだな。」

田中・海老名・奈々 「ははははは!」

沢渡 「...海老名さん!」

海老名 「ん?」

沢渡 「その前に雷をなんとかできませんか?」

海老名 「おっ! よく言った、その女子。」

沢渡 「沢渡です。」

海老名 「じゃあ、沢渡ちゃんのために。」

海老名、リモコンを押す。

大きめ雷の音。

沢渡 「きゃっ!」

沢渡、穂高の腕をつかむ。

海老名 「あー、「めんめん。これ、止める時一回鳴るんだわ。」

田中 「そのリモコン、最新式の変えた方がいっすよ。そしたら室内では絶対鳴らないですから。」

海老名 「だなく。」

穂高 「それより雷がリモコン式って……。」

沢渡 「うん……。」

田中 「それはさておき、そのおふたりさん、いかがしましょ。」

沢渡、穂高の腕を離す。

穂高 「沢渡さん。」

沢渡 「いまさらだけど、沢渡でいいよ。」

穂高 「うん。……沢渡、は北見ってやつが好きなの？」

沢渡 「え?!」

穂高 「あの人は、俺と一緒にいた妖精と違って感じよさそうだったもんなあ。」

沢渡 「そうかもしれないけど、さすがにそうは思っていないよ。」

穂高 「そうなの？」

「突然こんなところに来て不安だったところで面倒を見てくれたから頼りにしていたけど、知り合っただけかだもん。それに北見さんは……あ！田中さん、わたしの代わりに妖精さんの恋を叶えることはできますか。」

田中 「え?! 北見の？」

沢渡 「はい。」

田中 「それはどうだろ。俺の仕事の範疇じゃない気がするなあ。」

チャイムの音。

引き続き、海老名の家(兼オフィス。)

海老名 「はい。……って、誰だ？」

チャイムの音。

海老名 「どうぞ。入んなよ。」

北見、西野、豊田、入ってくる。

豊田はステッキを持っている。

沢渡 「北見さん！ 豊田さん！」

西野 「西野もいるんだけど。」

沢渡 「あ、「めんなさい。」

西野 「ううん。穂高！ なんて呼んでくれないの！」

穂高 「えーっー！」

西野 「えーっ、じゃないでしょ。」

海老名 「豊田ちゃん。よく来たね。」

豊田 「お疲れさまです。」

海老名 「堅苦しい挨拶は抜きにして。それよりずいぶん大勢で来たね。どうしたの？」

豊田 「(田中を見て)あの、日向は？」

田中 「うちの、愛の神オフィスじゃないかな？「こちに用はないし。」

豊田 「どうしようかな……。」

田中 「日向がどうかした？」

チャイムの音。

海老名 「はい。……って、今度は誰だ？」

日向、入ってくる。

日向 「お邪魔します。うわあ、なんかす「いっばいいますね。」

田中 「日向！ 何しに来た？」

日向 「え？」

海老名 「噂の日向の「登場ですな。」

奈々 「ですな。」

日向 「なんですか？ 噂って……。」

田中 「わーっ！ 何でもない……！」

日向 「まあいいですけど。わたしは豊田さんに呼ばれたんです。田中さんこそいつまで」「
日向 「いるんですか。まだ仕事が終わってないんですか？」
田中 「俺も忙しいんだよ。」
日向 「じゃあ何ですか、そのトランプは？」
田中 「うあー……！」

田中、トランプをかき集める。

日向 「もしかしてふたりを見届けられるかな、と思って急いで来たらこれですか(溜息)」「
豊田 「日向はほんと仕事熱心ね。」
日向 「このお仕事が本当に楽しいんですよ。」
海老名 「なるほど。田中くんもこれは前途多難だなあ。」
日向 「え、どどういう意味ですか……？」
田中 「(遮って)うわーっ！あの、沢渡さんに穂高さんさ、どつなのっ」
沢渡 「えっと……。」
穂高 「俺は……、出会ったばかりでこんなことを言うのもあれかもしれないけど。」
田中 「うん。」
穂高 「沢渡さんが好きです。」
沢渡 「えー！」
穂高 「今の俺の中では出会って間もないんだけど、すごく前から気になっていた人、そんな気がするんだ。」
沢渡 「穂高……。」

沢渡、穂高、見つめ合う。

田中 「沢渡さん。」
沢渡 「はいっー！」
田中 「あなたが気になるお相手は、北見でないね？」
北見 「僕？ー！」
沢渡 「はい、もちろん。あ、北見さん、ごめんなさい。」
北見 「いや、それが正しいよ。」

沢渡、うなづく。

沢渡 「(田中に)わたしも穂高が、ずっと前から気になっていました。」
穂高 「えー！」
田中 「うん。よく言ったね。じゃあふたりで帰りなさい。その傘を差して、雷が鳴っていなかったとしても寄り添って、ね。」
沢渡 「はい。」
田中 「その傘は、穂高くんが差してくれるから。そうしたらふたりはうまくいくから。な、

穂高くん。」

穂高 「え？ ……はい。」

田中 「はい、未来のカップル成立く。」

沢渡、穂高を除いたみんな、拍手をする。

穂高 「ありがとうございます。」

沢渡 「ありがとうございます。え、でも、未来って？」

沢渡、不思議そうにみんなの顔を見回す。

沢渡、穂高を除いたみんな、気にも留めない。

20場

引き続き、海老名の家(兼オフィス。)

豊田 「じゃあ、せつかくだからふたりがあつちに帰る前に、いいですか？」

田中 「うん、どつした？」

豊田、ステッキをおもむろに構える。

豊田 「北見。」

北見 「はっ。」

豊田 「今回は、特によくがんばったね。」

北見 「ありがとうございます。でも豊田さんに「迷惑も掛けたし、やっぱり相方の西野と……日向のおかげです。」

日向 「わたしは関係ないですよ。北見さんがいつも仕事に真摯に向き合った結果です。」

北見 「いや、日向が……。」

豊田 「(遮って)それはともかくとして、北見は今までほんとはがんばりました。」

北見 「はっ。」

豊田 「今日までお疲れさま。この仕事は今をもって卒業してもらいます。」

全員(豊田以外) 「えー！」

北見 「ちよつと待ってください！僕はこの仕事が好きです。今回のことは本当に反省しています。だから、今まで以上に努力するから、辞めさせるなんてことだけは言わないでください……。」

豊田 「辞めるのではなくて、ステップアップしたら、と言ったらっ。」
北見 「えっ。」

豊田、ステッキを振りかざして北見に当てる。

浅井、羽を持って入ってくる。

浅井、北見に羽をつける。

北見 「あの、これは……。」

浅井 「ようこそ、天使界に。」

北見 「え……。」

豊田 「おめでとう、恋する天使の北見くん。」

西野 「……豊田さんの魔法で北見の種族が変わったの？」

豊田、微笑みながらうなずく。

西野 「わあーっ……。」

西野、喜ぶ。

豊田 「西野が喜んでくれてよかった。正直心配だったのよ。」

西野 「兄貴分の幸せを願わないわけじゃないでしょ。」

豊田 「いい一人前の口を利くようになったわね。」

西野 「えへへ。」

豊田 「北見、申請書は特例扱いで無断で作っちゃったけどよかったかしら？」

北見 「はい、ありがとうございます。」

浅井 「でも本気で付き合いたいなら、北見さんもがんばって格を上げた方がいいと思っただけね。先に言うだけ言っただけならどうですか？」

北見 「えー！」

奈々 「田中に取りられる前に？」

田中 「え？」

西野、日向の手を引き北見の前へ導く。

日向 「え？ え？？」

北見、日向、目を合わす。

西野 「北見〜！」

奈々 「北見〜！」

浅井 「北見っ〜！」

北見、みんなの方を見る。

沢渡、北見、目が合う。

沢渡 「北見、さん〜！」

北見、日向を見直す。

北見 「日向〜！」

日向 「はい〜！」

北見 「……ずっと好きだったんだ。仕事もなんでも一所懸命な日向が。でもこれは叶わぬ恋だとわかった。」

日向 「……。」

北見 「今はまだこの羽をつけたばかりの新米天使だけど、必ずさらにステップアップして君に追いつくから、僕の恋も、叶えてくれませんか？」

日向 「……はい。よろしくお願いします。」

西野 「きや〜っ〜！」

田中 「(西野と同時に)ああっ!」

田中、崩れ落ちる。

田中以外、西野と一緒にキャラクターベースで盛り上がる。

浅井、田中の肩に手を置き、

浅井 「まあ、そのうちいいことありますよ。恋はあせらず。」

田中 「なんと皮肉な響き……。」

豊田 「そっか。田中さん、ごめんね。でも、北見を変わず恋を叶えるこのお仕事ができるようにしてくれないかな。」

田中、浅井の助けを借りながら立ち上がり、

田中 「……わかりました。」

田中、北見の方へ行き、

田中 「おいっ! 俺は、男には厳しいからな。」

北見 「よろしくお願いします!」

北見、頭を下げる。

田中、手を差し出す。

北見、顔だけ上げて田中を見つめ、ゆっくり頭を上げて手を握り返す。

海老名 「よっ、田中……カッコいいボス……!」

田中 「褒められてもうれしくないっすよ。でも、俺もしばらく仕事に一所懸命になりますわ。」

日向 「田中さん、やっとですか。」

田中 「おまえに言われたくないわ。」

日向、田中、顔を見合わせて笑う。

田中 「北見、恋を叶える天使の最初の仕事だ。」

北見 「はい。」

田中 「おまえらふたりで手をつないで、未来のカップルに例を見せてやれ。」

北見 「え……。」

田中 「返事は、え、じゃなくて……」

北見 「はい……!」

北見、日向の手を取る。

北見、日向、顔を見合わせて微笑む。

北見 「じゃあ、次は……。」

北見、穂高を見る。

穂高、うなずいて沢渡の手を取る。

他全員、拍手をする。

日向 「幸せになってね。」

沢渡 「はい。」

奈々 「こいつ、照れてる〜。」

西野 「でも、日向の方が照れてる〜。」

日向 「いいでしょ〜。」

沢渡、日向、顔を見合わせて、

沢渡・日向 「ねーっ。」

全員、笑う。

雨の音。だんだん強くなっていく。

暗転。

21場

オフィス。廊下。

明転。

沢渡、うつぶせに倒れている。

横には投げ出されたようにノートパソコンがある。

沢渡、ゆっくり上体を起こしながら、

沢渡 「…寝てた？ あ、パソコン！」

沢渡、パソコンを取って、開きながら、

沢渡 「壊れて…ない。よかったー。あれ、このファイル…？ 資料が、できる？！ 何で…。」

沢渡、立ち上がり、舞台前方へ行く。

沢渡 「やっぱり止まなかったかあ。」

沢渡、ため息をつき、

沢渡 「仕方ない。濡れて帰ろう。」

沢渡、傘を取りに行った方向へ出ていく。

暗転。(場転用。)

雨の音が強くなる。

明転。(雨避けのあるところとわかるよっだといい。)
オフィス玄関口。

沢渡、入ってくる。

沢渡、立ち止まって空を見上げて、

沢渡 「これは風邪引くかも。」

穂高、沢渡に貸してもらった傘を差して入ってくる。
沢渡、気づく。

穂高、近づいてくる。(沢渡のところまで来たら話しながら傘を降ろせるといい。)

沢渡 「穂高……。なんで。」

穂高 「会社出てすぐヤフーで調べたら、朝まで降ってるって書いてあつたぞ。」

沢渡 「……。」

穂高 「だからまんが喫茶でおまえを待とうと思ったんだけど、まんが読んでたら寝ちゃってさー。」

沢渡 「うん？」

穂高 「変な夢見たよ。」

沢渡 「夢……。」

穂高 「異次元の世界っていうのかな？そこで出会った女のコと雷神に会いに行く話。しかもその時もこの傘差してんの。どれだけおまえの傘を使いたんだよ、っていう。」

沢渡 「……好きなデザインだった？」

穂高 「女性用だけだな。」

二人、笑う。

沢渡 「わたしもね、……。」

穂高 「うん？」

沢渡 「ううん、何でもない。」

穂高 「なんだよー。」

沢渡 「それより早く駅行かないと、わたし電車なくなっちゃう。」

穂高 「そうだ！急がないと。」

穂高、傘を沢渡の方に近づける。

沢渡 「……穂高、ありがとう。」

沢渡、言いながらアクセサリーに手を添える。

沢渡、傘に入り、少し迷って穂高の腕に手を添える。

穂高、沢渡を見る。

沢渡、ゆっくり穂高を見る。

二人、微笑んでそのまま歩き始める。

途中より音楽、フェードイン。

照明、歩き出したらゆっくりフェードアウト。

暗くなる中でスポットが床の上にある羽を照らす。

暗転。

(終)